

書評と紹介

中沢見明著

真宗源流史論

故 中沢見明氏の始めての著書「史上の親鸞」が世に問われたのは、第一次世界大戦後の「デモクラシー」運動が最高潮に達した大正十一年であつた。親鸞についても、倉田百三の「出家とその弟子」や多くの文芸作品が作られて伝統と奇蹟の蔭に蔽い隠されていた人間性が漸く一般社会人の注意を惹いている時であつた。学界でも、山田文昭・鷲尾教導・長沼賢海氏などの東西両本願寺関係の史学者や辻善之助博士の調査研究に依つて、親鸞関係の史料の解釈が緻密に行われて、惠信尼書状のような有力な史料が発見され、親鸞の前身・入信の動機・信仰の確立・家族の動静などについて、重要な新事実が知られ始めた時であつた。云わば親鸞研究が大きく伸びようとして、その基本的な条件が揃いつゝある時であつたが、中沢氏の「史上の親鸞」の

發表が学界に与えた刺激は一際大なるものがあつた。この著は周知のように、親鸞の家系の研究に重点を置き、親鸞は皇太后宮大進日野有範の子であると云う本願寺の古い伝へは、三代寛如の捏造であると断定したのであるが、それが教権で歪められない親鸞の人像を知ろうと努めていた当時の要望によく適合し、大きな感動を与えたのである。中沢氏が寛如の作為のあとを仮借することなく暴き得たのは、本願寺とは中世以来対立していた専修寺の人であつたからとも云い得られようが、独学の人とは思えない程に鋭利な史料の批判解釈の力に恵まれ、これを養い上げたことが、先人が容易に踏み越えられなかつた一線を破つたものと云うべきであらう。

「史上の親鸞」發表以後、中沢氏は古事記偽書論で一時学界を賑わせたが、その後は専修寺関係者で編輯発行の高田学報に初期真宗教団に関する論文を發表することが多かつた。この研究雑誌には専修寺の容易に見られない聖教や史料が公刊されることが多く、一部では重視されていたが、何分にも頒布の範囲が狭いので、それに掲載された論文が広く

読まれることは困難であつた。現に京都大学でもこの雑誌の備付はなく、これを見ようと思えば、大谷大学か龍谷大学の図書館に行かなければならないのである。従つて「史上の親鸞」發表以後の中沢氏の業績は、一部の人以上はこれを知り得なかつたのであるが、昭和二十一年に死去した中沢氏の遺囑を受けて令甥京都大学助教武内義範氏の計いで、今回「史上の親鸞」以後の初期真宗関係の論文が一纏めにされ、「真宗源流史論」として公刊された。時はまた親鸞に対する関心が昂まつている時で、歴史の面でも、文芸の面でも、新しい發表が続いている時に、一生を親鸞伝の研究に捧げた史学者の論文が、このように纏められた形で出版されたことは、喜びに堪えない。

さてその内容であるが、序章を含め十一章に分類されているうち、序章「浄土真宗の意義」第一章「専修念仏宗の教団組織及其の経済問題」第二章「法然諸仏成立考」第三章「親鸞と四十八巻伝及九巻伝の記事に就いて」第四章「西方指南鈔と漢和語彙録」第五章「浄土宗支持の諸門弟」第八章「選択相伝

の御影に就いて」は親鸞と源空との交際を研究の重点とするものであり、第六章「親鸞伝絵の古写本」第七章「御伝鈔の信仰と親鸞日記」第九章「教行信証の研究」第十章「親鸞門下のひとびと」は親鸞又は親鸞と門弟の關係を問題にしたもので「史上の親鸞」の続稿とも云うべきものである。「史上の親鸞」發表以後の中沢氏の研究の中心はこの書の前半に収められた部分に在つたもよう、源空門下で最早く教団組織を整えた鎮西派に対し、鋭い批判を加えた。最初に發表されたのは本書の第二章と第三章であつて、いづれも「史上の親鸞」出版翌年の成稿である。文字通り、眼光紙背に徹した史料の批判力は本書の序文で辻博士が賞揚しておられる通りで、鎮西派が派祖弁阿以来、源空との關係を強調する余り、史実を曲げて源空が後白河院御臨終の善知識であつたことを始めとして、多くの疑問の伝記を作つたのに対して、一々それを明らかにした。法然伝成立の系列として、源空聖人私日記↓本朝祖師傳記絵詞↓捨遺古徳伝↓四十八卷伝↓九卷伝と、氏が定めたものは、醍醐寺本法然上人伝記を氏に取り上げな

かつたことを除けば、美術史研究の分野で今日でも基礎となつてゐる。今度この書で初めて公表され、美術史学者が是非注目しなればならないのは、第八章である。教行信証に親鸞が自分で書いてゐる選択集相伝の記念に源空から貰つたと云うその肖像画が三河国桑子妙源寺に伝わつてゐることを發表したもので、図版で判断すると、賛の筆致が原山寺本の選択集の内題と一致すると云う中沢氏の主張は一応承認されてよい。画にも古處が認められるから、筆蹟、画風の両方から原本を精査する必要がある。

後半の親鸞、親鸞と弟子の關係の分では、第六章は西本願寺本と専修寺本の親鸞伝絵を研究の対象とし、この二本が同様に二巻本でありながら、西本願寺本に定禪夢想の段があることに研究の重点を置いて述べてゐる。併し西本願寺本は氏の云うように永仁の草稿本であるとは考えられない点があり、西本願寺の専阿筆の親鸞像の懸幹の分は専阿筆でないと言ふ氏の見解も、恐らく美術史家の賛同は得られないであろう。第七章は「史上の親鸞」で中沢氏が最も力を注いだ日野系図の研究を改訂したことが注意され、山田文昭氏の發表した経尹一有範一親鸞の系譜を事実として承認した。第九章の「教行信証の研究」は、教行信証脱稿の時として化身土卷の元年が用いられるのに反対して、親鸞が説法にのり出したのは寛喜三年の夢想以後であらうとし、教行信証の起稿に着手したのは専修寺蔵の見聞集を根拠として、文暦二年以後であるととし、成稿は寛元五年までであるとするのである。この点についてはその後多くの人の批判があるが、親鸞の説法開始を寛喜三年以後と限定するのは少し無理であり、草稿は恐らく元仁元年よりも古く、完稿は寛元五年より遙かに後で、弘長二年九十歳で死ぬ三四年以前と見るのが正しいであろう。第十章では坂東本の弘安六年の沙門性信の奥書を明性についての記事を含めて性信の自筆としたのが注目され、山田文昭氏が明性・性信の各々の自筆、富崎田邊氏が性信の署名花押を顧る疑うべしとしてゐるのと対照的である。中沢氏の見解が恐らく正しいのであらう（一九五一年一月京都法蔵館発行A5、三六三頁コロタイプ二頁挿圖一箇五八〇円）——赤松俊秀——